

日蓮大聖人御書全集

きんごどのごへんじ

金吾殿御返事

新版
1354
ゝ
1355

きんごどのごへんじ

金吾殿御返事

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

おおたじようみよう

文永 6 年

(’69)

11 月 28 日

48 歳

(大田 乗明)

だいしこう

がもくこれんた

そうら

お

だいしこう

さん

大師講に鵜目五連給び候い了わんぬ。この大師講、三・

よねん

はじ

そうろう

ことし

だいいち

そうら

そうろう

四年に始めて候が、今年は第一にて候いつるに候。

ほうもん

かんもん

うむ

よ

ひろ

そもそも、この法門のこと、勘文の有無に依って弘まる

ひろ

べきか、弘まらざるか。

こぞ

かたがた

もう

否

諾

へんじそうら

去年方々に申して候いしかども、いなせの返事候わず

そうろう

ことしじゅういちがつ

ころ

かたがた

もう

そうら

しょうしょうへんじ

候。今年十一月の比、方々へ申して候えば、少々返事

そうろう

大

方

ひと

こころ

和

あるかたも候。おおかた人の心もやわらぎて、さもやと

思

そうろう

かみ

見

参

い

そうろう

おぼしたりげに候。また上のげんざんにも入つて候や

らん。

ひがこともう

そうら

る し

にぎい

うち

いちじよう

これほどの僻事申して候えば、流・死の二罪の内は一定

ぞん

何

もう

そうら

ふしぎ

と存ぜしが、いままでなにと申すことも候わぬは不思議と

覚

そうろう

至

どうり

そうろう

おぼえ候。いたれる道理にて候やらん。また

じかいほんぎやくなん

きようもん

あ

そうろう

さんもん

自界叛逆難の経文も値うべきにて候やらん。山門なんど

古

ひやくせんまんおくばい

どうよう

承

も、いにしえにも百千万億倍すぎて動揺とうけたまわり

そうろう

しさい

そうろう

しんたん

こうらい

候。それならず、子細ども候やらん。震旦・高麗すで

ぜんもん

ねんぶつ

しゆゐ

ぜんじん

さ

か

もう

に禅門・念仏になりて守護の善神の去るかのあいだ、彼の蒙

こ したが そうら わ ちょう じゃほうひろ てんだい

古に従い候いぬ。我が朝もまた、この邪法弘まつて、天台

ほつけしゅう こつしよ さんもんあんのん しだんいほん くに

法華宗を忽諸するのゆえに山門安穩ならず。師檀違叛の国

な そうら じゅう はち く 見 そうろう

と成り候いぬれば、十が八・九はいかんがとみえ候。

じんしん 受 じゃし 免 ほけきよう

人身すでにうけぬ。邪師またまぬかれぬ。法華經のゆえ

るぎい およ いま しぎい おこな ほんい そうら

に流罪に及びぬ。今、死罪に行われぬこそ本意ならず候え。

しゅつたい そうら 励 そうら

「あわれ、さることの出来し候えかし」とこそはげみ候

かたがた ごうごん 書 あ 置 そうろう

いて、方々に強言をかきて挙げおき候なり。

としごじゅう およ よめい 幾

すでに年五十に及びぬ。余命いくばくならず。いたずら

こうや 捨 み おな いちじようほつけ 方 投

に曠野にすてん身を、同じくは一乗法華のかたになげて、

せつせんどうじ やくおうぼさつ あと 追 せんよ うとく な こうだい とど

雪山童子・薬王菩薩の跡をおい、仙予・有徳の名を後代に留

ほつけ ねはんぎよう と い

めて、法華・涅槃經に説き入れられまいらせんと願うところ

なんみようほうれんげきよう

ろなり。南無妙法蓮華經。

じゅういちがつにじゅうはちにち

にちれん かおう

十一月二十八日

日蓮 花押

ごへんじ

御返事

しかん ご しょうがつついたち

読 そうら

げんぜあんのん ごしょう

止觀の五、正月一日よりよみ候いて、「現世安穩、後生

ぜんしよ

きしょうつかまつ

そうろう

びんぎ

たも

そうろう

ほんまつ

う

善処」と祈請仕り候。便宜に給うべく候。本末は、失

そうら

修理

そうろう

おお

ほんい

せて候いしかども、これにすりさせて候。多く本入るべ

もう

そうろう

きに申し候。